新潟市文書館だより

2024.2
NO.2

「旧武田家住宅（民家旧宅）」と高橋源助の証文について

新潟市文化財センター（新潟市西区木場2748番1）の敷地内に所在する「旧武田家住宅」は、新潟市内では最古級とされる茅葺民家で、昭和45（1970）年の４月に旧黒埼村が指定した有形文化財（民俗資料）です。屋内には古さを証明する槍鉋痕や手斧痕が残っています。この建物はもともと木場集落内に建てられていましたが、２度にわたる移築の末に現在地に鎮座しています。所有者であった武田家は、戦国期に甲斐、信濃方面より越後に渡り高橋姓を名乗り曽根で百姓になったと伝わっています。

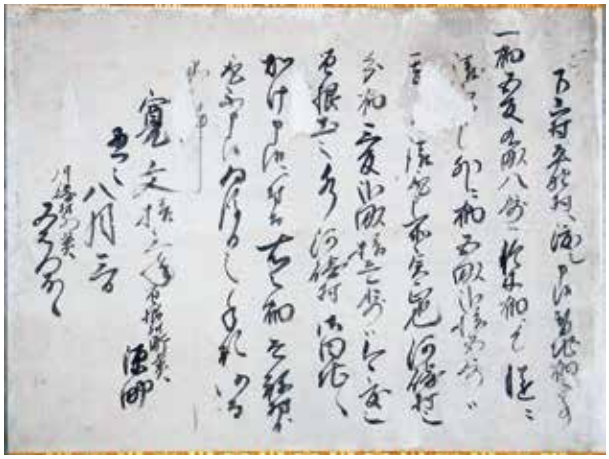
▲ 旧武田家住宅【西区・新潟市文化財センター内】

話は変わりますが、西蒲区曽根（見帯：旧西川町）に義人高橋源助の墓と首塚が伝わっています。源助は曽根村の肝煎として村人と積極的に新田開発を進め、用水確保のため西川上流より樋管敷設および用水筒の掘削を行いましたが、それをねたんだ役人により打首になったと伝わります。主人を亡くした源助家は、さらなる難から逃れるため密かに小中川（現燕市）に移転したそうです。

▲ 伝高橋源助首塚【西蒲区曽根】

旧武田家住宅についての説明HP
▼

さて、左下は「源助の証文」です。これは、昭和54（1979）年４月に旧黒埼町が有形文化財（古文書）として指定したもので、表題には、「下山村平野村へ渡シ申候替地畑之事」とあります。証文の中の村名（下山、平野、川崎、曽根）はすべて旧西川町内にある地名であり、明確にはわかりませんが、新たな用水路を引くにあたり、寛文13（1673）年８月３日、曽根村肝煎の源助が川崎村肝煎に差し出した代替地に関する証文の控えです。この証文からも、源助が用水路を導入することに尽力していたことがわかります。この「源助の証文」は旧武田家住宅の所有者であった武田家に伝わる古文書です。今後、地域史料等の発見によりこれらの事実関係がさらに明白になることを期待します。



▲ 高橋源助が又右衛門に送った証文【旧武田家住宅の床の間に展示】

下山村平野村へ渡シ申候替地畑之事
一畑五反九畝八歩ハ鈴木畑ニて慥ニ
請取申、外ニ畑五畝弐拾五歩ハ
甚□請取申所実正也、河崎村之
分畑三反弐畝拾壱歩ハ今度之
曽根土之水河崎村御田地へ
かけ申候ニ付而、右之畑曽ね村より
取不申候、為後日之手形仍而
如件

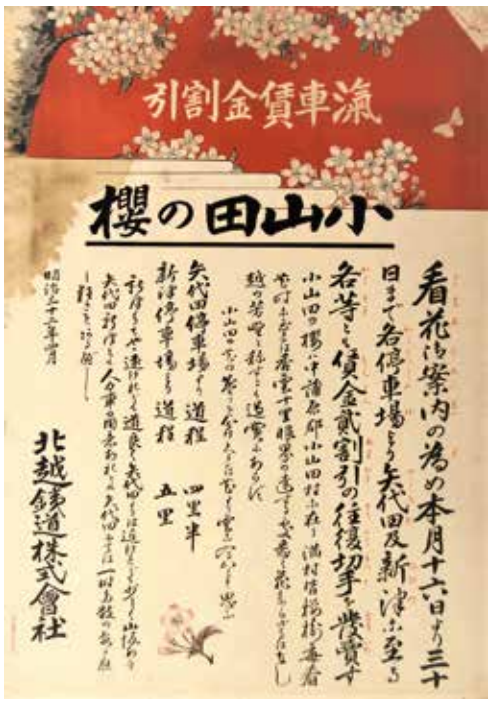
寛文拾三年　曽根村肝煎　源助
丑之　八月三日
川崎村肝煎　又右衛門殿

令和５年度企画展から「新潟のチラシ～引札から百貨店広告まで～」

新潟市文書館では現在、企画展を開催中（会期：令和５年７月29日～令和６年３月23日まで）です。主に明治期から昭和期にかけての広告（引札やチラシ）資料を展示しています。ここではその一部を紹介します。引札は、大変美しい印刷物で一見の価値があります。このほか、百貨店や映画の古いチラシ、内野大火の展示とその後の復興チラシなど、大変貴重なチラシの類を見ていただきたいと思います。

引札の世界

引札は、商店等が開店や商品売出しを宣伝するために配られたもので、現在のチラシ広告にあたります。引札という言葉は江戸時代中期頃に生まれ、その語源は「お客を引く」、「引き付ける」、「配る（引く）」など諸説あり、江戸では「引札」、京坂では「ちらし」と呼ばれていました。引札は商業活動が活発化した18世紀末から19世紀初めにかけて盛んに作られるようになりました。明治以降は鮮明で繊細な図柄の引札が作られるようになりました。これは木版印刷から銅板印刷や石版印刷へと印刷技術が進歩したからです。しかし、新聞が各地で発刊されるようになり、折り込み広告や掲載広告が広まるにつれ、引札はしだいに姿を消していきました。



◀無題（中扉に「温故知新」とある）（石版刷り引札等）資料番号20051116

北越鉄道株式会社（明治30年開通）が、明治32年に出した引札。汽車に乗り小山田の桜（現五泉市）を見に行きましょうと誘う内容。運賃割引あり。矢代田駅からは４里半、新津駅からは５里の道のり（１里は約3.9㎞）。明治の人々は、４里や５里を歩くことは、苦ではなかったのでしょうか。

二次元コードを読み取ると、本頁に掲載の資料の詳細を確認できます。

北越鉄道　長谷駒商店　金比羅館

◀引札（沼垂町高等御ハキモノ）資料番号20173453

大正４年の年末に新潟市沼垂町長谷駒商店が出した引札。正札附き（掛け値なしの値段）の商品を扱っていることを記しています。赤穂浪士大石内蔵助を描いた図案で精緻で鮮やかな石版印刷です。長く利用してもらえるよう大正５年の略暦が掲載されています。印刷業所は、大阪市の中井徳太郎。

新潟映画館のチラシ

新潟市に活動写真の常設館（大竹座）ができたのは大正３（1914）年のことです。その後次々と常設館が開館しました。それまで主に劇場や寄席で上映されていましたが、活動写真の人気とともに活動写真館に改築されることが多くなりました。大衆娯楽の中心が、芝居から映画へと移ったのです。常設館以外での活動写真の最初の上映は、明治37（1904）年といわれています。活動写真館の建物は当時としてはとても立派で、ハイカラだったようです。そして、昭和30年代に映画は黄金時代を迎えます。活動写真を初めて観た人々は、「写真が人間と同じように動く！」と不思議だったようです。また、トーキーの時代になると「映像から声が出てくる！」ことに驚いたといわれています。

▲チラシ（空前の巨篇 孫悟空）　資料番号20094810
中央区西厩島町にあった金毘羅館の映画「孫悟空」のチラシ。オールトーキーであることを強調しています。

所蔵資料紹介 初代萬代橋の資料「架橋之儀ニ付願」（明治18年）

「新潟より沼垂に達するの大河、これまで渡川をもって通行せしにつき、平常交通運搬の不便なるは勿論、烈風雨または冬季の候に至れば通船を止むること数々これあり」

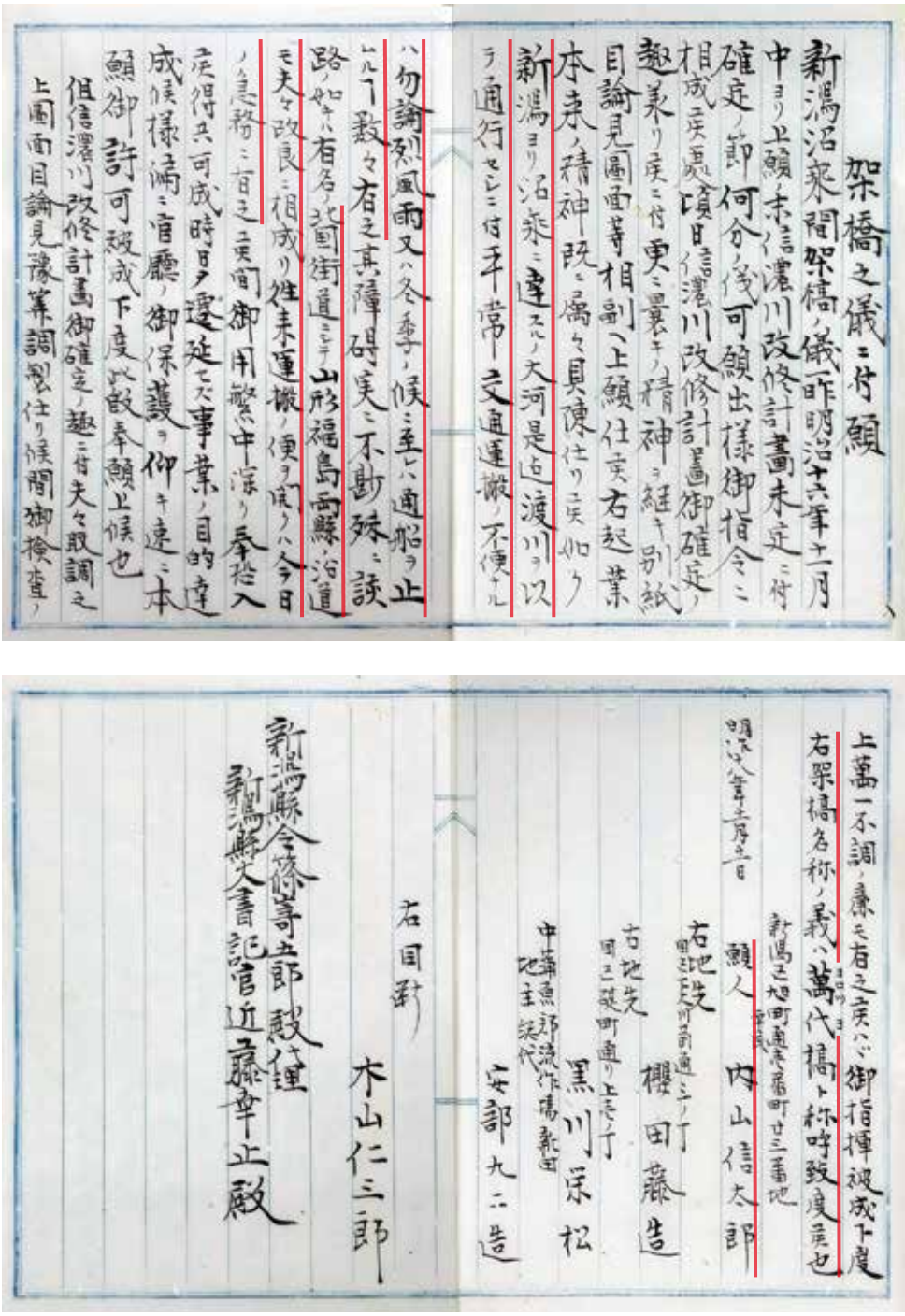
本資料の中ほどに、そう書かれているとおり、明治初期、新潟・沼垂間の信濃川（川幅は700～800m）にはまだ橋はなく、渡し船で往来していました。明治６（1873）年から11（1878）年にかけて、橋を架ける計画が度々出されていましたが、新潟県からの許可はおりませんでした。

明治16（1883）年と18（1885）年に、新潟日日新聞社社長であった内山信太郎は、信濃川架橋の出願をします。今回紹介する資料は、その２回目のものです。

「（架橋する道は）北国街道にして、山形福島両県の沿道もそれぞれ改良に相なり、往来運搬の便を開くは、今日の急務にこれあり」

と出願の理由が書かれています。隣県の整備が進む中、「大河信濃川が流れる新潟と言えども、遅れを取るわけにはいかない」という内山の決意が読み取れます。

願書の最後には、



▲資料名「万代橋架設願書」資料番号20050092

「右架橋名称の義は萬代（よろづよ）橋と称呼致したく候なり」

と、橋名も書かれています。萬代までも橋が存続し、新潟の発展に資するようにという意味が込められていたと考えられます。

翌年の明治19（1886）年２月には、架橋を認められますが、内山は、資金調達に苦労します。紆余曲折の末、最終的には当時の第四国立銀行頭取であり、後に新潟市長にもなる八木朋直から、出資を受けることになります。

工事は順調に進み、一年足らずで橋は完成します。明治19（1886）年11月には竣工式が取り行われ、橋の自由参観時には約２万人の人々で埋め尽くされたとのことです。初代萬代橋は、その当時の日本で一番長い木橋（約782m）となりました。

二次元コードを読み取ると本頁に掲載の資料の詳細を確認できます。

小中学生向け講座「昔の新潟の様子って？ ー新潟の今・昔マップを作ろうー」

令和５年７月29日、文書館を会場として小中学生向け講座を開催しました。

当館所蔵の古文書に触れる体験や、写真資料を使用し、新潟市中心部の現在と昔の様子を比較する地図を作る活動を行いました。西堀通や萬代橋など現在と大きく異なるものもあれば、市役所の大松のように現在でも見られるものもあり、参加者の皆さんは興味深く活動をしていました。なかには講座後に、作成した地図を使って自由研究を行った参加者もいました。

▼西堀通の今・昔

▼萬代橋の今・昔

参加者の感想

- 昔の文書をさわって、和紙はすごいなと思いました。
- 昔は信濃川の川幅が広かったり、新潟駅の位置が少し違ったり、資料を大切に保管しているからこそ分かったことが多いと思うので、資料をしっかり保管することがどんなに大切なことなのかがよく分かりました。

普及啓発事業（職員派遣等）【R５.４月～R６.２月】

テーマ・内容	期　日	主　催	テーマ・内容	期　日	主　催
新潟市の歴史と北区の遺跡について	５月 ９日	朝日万年青クラブ	教科書表記を変えた新説の歴史について	10月27日 11月10日	新潟市立新津第二中学校
中之口村の歴史について	５月24日	中之口小学校ボランティア			
荻川地区の歴史について	６月20日	荻川小学校	港町新潟の歴史について	11月10日	紫竹山地区民児協
南区の地名･歴史について	６月30日	白根地区公民館	荻川の先人たちに学ぶ	11月18日	荻川地区コミュニティセンター
初級古文書講座	７月12日 ８月 ９日 ９月13日	巻郷土資料館	新潟湊の水先案内人	12月14日	西新潟オープンカレッジ運営委員会
			明治天皇巡幸と新潟	１月13日	関屋地区公民館
金津の発展と石油	９月20日	金津地区コミュニティセンター	紫竹山･女池周辺の歴史	２月 ２日	紫竹山地区民児協

文書館の利用案内

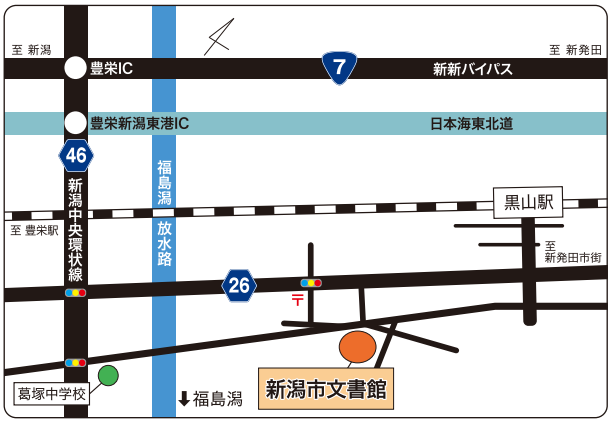
資料の申請方法や申請に必要な様式は文書館ホームページにも掲載しておりますが、直接ご来館やお電話いただいても対応しております。また、インターネットで当館所蔵の資料の目録を検索することができます。下の二次元コードを読み取っていただくか、「新潟市文書館所蔵資料検索システム」と検索してください。

資料の利用方法

「新潟市文書館」で検索 ▶

当館所蔵資料の検索

「新潟市文書館所蔵資料検索システム」で検索 ▶



◆開館時間　午前９時～午後５時まで
◆休 館 日　日曜日、月曜日、祝日、年末年始
◆入 場 料　無料
◆アクセス　ＪＲ白新線黒山駅より徒歩約15分
　　国道７号豊栄ＩＣより車で約10分（駐車場有）

新潟市文書館だより　２号
令和６年２月発行　　発行・編集：新潟市文書館
〒950−3313　新潟市北区太田862番地１
TEL（025）278−3260　FAX（025）278−3328
メール　bunshokan@city.niigata.lg.jp

※文書館ホームページに「歴史資料だより」のバックナンバーを掲載しております。